

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：23804

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770046

研究課題名(和文) 貫戦期日本の建築論と美学・デザイン論の交流

研究課題名(英文) Crossing of Architecture, Aesthetics, and Design in Transwar Japan

研究代表者

天内 大樹 (AMANAI, Daiki)

静岡文化芸術大学・デザイン学部・講師

研究者番号：40615035

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：建築論に関する研究の蓄積を元に、改めて芸術論の主軸としての美学、および大局的に見て近代建築論と並行して発生したものと考えられるデザイン論の3軸の交渉を、4つの具体的なフェーズを通して描き出す研究である。貫戦期というフレームのなかで、戦中の資料の乏しさを埋めるという課題が付きまとったが、4つのフェーズのうち1つに関しては成果発表を準備中であり、2つに関しては分析を進め、同じく成果発表につなげる。最後の1つに関しては資料を探す枠組みを変更することで対応できると思われるが、これは別の課題として継承・発展させて取り組んでいるところである。

研究成果の概要(英文)：This is a project to describe the four phases of the crossing of three axes: architecture, which I have continuously concerned; aesthetics, which should be a main realm of argument on the arts; and design, which generated parallel with an establishment of modern architecture. Although it involves the lack of material in the wartime, inevitably in the frame of transwar, I am preparing some results from one phase; analysing from two phases; and changing the viewpoint of a phase to access an adequate quantity and quality of material, which will be succeeded and established in another program.

研究分野：美学芸術学 / 建築思想史

キーワード：渡邊吉治 外山卯三郎 商工省工芸指導所 世界デザイン会議

## 1. 研究開始当初の背景

【経緯：対象】申請者は東京理科大学の研究プログラムで、近現代日本を一貫する建築理論を探究してきた。そこでは第二次大戦前後の理論の一貫性を抽出する方法論が問題として浮上した。1940年代前後は建物自体ほとんど建てられず（当然現代に残っておらず）、また雑誌類の発行も論考の主題も制限されており、ハード・ソフト両面で資料が乏しい。しかし40年代前後で建築のモダン・ムーヴメントの位置づけは錯綜している。つまり戦前では現代にいう「帝冠式」（コンクリート造に瓦屋根や寺社建築の要素を付加したもの）との対立関係があり、戦後も一旦戦後民主主義と結合し（浜口隆一『ヒューマンイズムの建築』1947）ながら、50年代末の「伝統論争」（日本らしさの起源が問われた）を踏まえて新展開を示したという、イデオロギー上のねじれがある。

【経緯：方法】また申請者個人の学位論文など従来の研究では、日本初の建築運動である分離派建築会（1920-1928）の結成と終焉の理論的要因として「芸術」概念を挙げてきた。しかし建築ジャンルに限っても使用者により意味のブレが大きい「芸術」概念の背景には、他領域の影響が濃厚に窺われる。申請者は分離派の時代に関して、各種芸術ジャンル（文芸、絵画、音楽）ばかりか、構造力学、社会運動（ないし社会主義）、人文地理学などの影響を指摘している。すなわち、研究対象として建築ジャンルの雑誌論考や著書に限定しないほうが、建築理論の整理が容易だと分かった。特に1940年代前後に関しては美学と工芸（戦後は「デザイン」）が、建築との関連において浮上してくる。

【研究動向】建築史学では、戦後唯物史観の立場から階級論が重んじられたことの反動で、特に近代に関して実証重視の傾向にある。近年英語圏で近代史学に通史的大著が出ている（ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』1999、ハーバート・ビックス『昭和天皇』*Hirohito and the Making of Modern Japan*, 2000）のに比べ、国内では政治史から御厨貴や原武史らが個別トピック（邸宅、鉄道巡幸、団地など）を扱ったにとどまる。建築史学では技術史的な村松貞次郎『日本近代建築の歴史』（日本放送出版協会 1977）、概説的なDavid B. Stewart 著書（*The Making of a Modern Japanese Architecture: 1868 to the Present*, Tokyo: Kodansha International, 1989）と、稲垣栄三の辞書項目“Japan”（『稲垣栄三著作集 五』中央公論美術出版 2009、*International Handbook of Contemporary Developments in Architecture*, 1989 所収）などに限られる。一方、イデオロギー面から中谷礼仁『国学・明治・建築家』（一季出版 1993）は示唆的であるが、八束はじめ『思想としての日本近代建築』（岩波書店 2006、戦後は扱っていない）と同様、建築というジャンル固有の問題が捨

象されがちである。

以上から、今後の研究ではイデオロギーなど全体的な視点に回収せずに建築というジャンル固有の問題を確保しながら、他ジャンルとの交通を視野に収めることが必要である。これが近代日本における1940年代という建築理論のミッシングリンクを解く鍵である。

## 2. 研究の目的

【研究の視座】本研究ではアンドルー・ゴードン『日本の200年』（*A Modern History of Japan: From Tokugawa Times to the Present*, 2003）が示唆した、貫戦期（transwar）という視点を採用する。同著が日露戦争講和＝ポーツマス条約からサンフランシスコ講和条約まで（1905-1952）を括るのは、欧米からみた外交上の地位転換を重視するゆえだろう。本研究ではこの語で、日本が世界的なモダン・ムーヴメントの先端に立った1930年代（アントニン・レーモンド「霊南坂の自邸」1923は世界で最も早いコンクリート打ち放しの住宅だった）から、敗戦を経て世界への再発信を準備した1950年代（1960年世界デザイン会議＝東京でのメタボリズム宣言まで）を括る。

### 【研究内容】

1. 1930年代の美学と建築の関係を、とくに個別「芸術学」の導入やこれを準備した人々の理論と交流から抽出する。
2. 1930年代の工芸と建築の関係を、とくに工芸指導所と建築家の関係、あるいは同所の組織と理論的背景から抽出する。
3. 1950年代の美学とデザインの関係を、とくに美学から「純粋芸術」ならざる分野へのアプローチをめぐる議論から抽出する。
4. 1950年代のデザインと建築の関係を、デザイナーと建築家の共同を生み出した世界デザイン会議への人的理論的経緯から抽出する。

【学問的意義】建築史学の実証的傾向から、特定の建築専門誌や建築家に限った言説の検討が推進されてきたのに対し、建築と美学・デザインを接続しつつ建築に議論を収斂させる上記の枠組みは、ジャンル間の検討を行える美学・芸術学の立場を活かすものである。また建築・デザイン分野と美学との関連が深かった1930年代と50年代を総合的に俯瞰することは、近代日本美学に対する研究を、従来着目されてきた哲学的美学から個別ジャンルへ拡大するものである。これは「日常性」をキーワードに考察の範囲を拡げている世界的な現況に呼応し、デザインや建築環境を視野にいれた豊穡な美学観の再生につながる。

## 3. 研究の方法

本研究ではこれまでの申請者の個人・共同研究を土台として、他のジャンルとの交流から建築論の空隙を埋める試みであり、個別具体的な事例を重ねることが方法となる。重点的な調査対象としてすでに1.雑誌編集者を

キーとした芸術学と建築との交流, 2. 政府組織をキーとした工芸と建築との交流, 3. 美学出身評論家をキーとしたデザインと美学の交流, 4. 国際会議をキーとしたデザインと建築の交流が浮上しており, これらを順に精査していくことが当面の具体的手順となる。最終年において, これを理論的に整理することにより, 1940年代の建築論というミッシングリンクを把握し, これを国内向けに発表する。

#### 4. 研究成果

実際には, 貫戦期というフレームのなかで, 戦中の資料の乏しさを埋めるという課題がつかまとったが, 以上の4つのフェーズのうち1つ(1930年代, とくに渡邊吉治と外山卯三郎を中心とした議論の根えとワーク)に関しては成果発表を準備中であり, 2つ(商工省工芸指導所を中心とした, および世界デザイン会議に向けた議論のネットワーク)に関しては分析を網一段進めて成果発表につなげる。最後の1つ(小池新二, 勝見勝らに見るデザイン論と美学の交渉)に関しては資料を探す枠組みを変更することで対応できると思われるが, これは別の課題(大学・学校におけるデザイン教育)として形象・発展させて取り組んでいるところである。

美学会を念頭に置いた成果発表では, 渡邊吉治と外山卯三郎, および彼らが中心となって刊行していた『美学研究』『芸術学研究』両誌の傾向について, 当時の建築論から見た独特の位置づけから芸術論としての傾向に迫る予定である。また商工省工芸指導所に関しては多くの研究者が組織的に成果を積み上げているので, 文字史料を中心とした分析に絞る予定である。世界デザイン会議については, 当時の雑誌を中心とした分析に絞って既存の発表成果との照合に取り組んでいる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

AMANAI, Daiki. «Modernism and the Vernacular: an Architect in 1930s Japan», *Serbian Architectural Journal*, pp.29-42, 2014.06.

天内大樹「理念を伴った建築展 分離派建築会」, 『建築雑誌』, vol.129, No.1660, 2014.7, p.27.

天内大樹「サステイナブルな芸術の共同体 山口文象ノンポリ説からみた RIA の原点」, 『10+1 website』, <http://10plus1.jp/monthly/2015/03/issue-04.php>, 2015.3.

天内大樹「コンクリートの普遍性と地方性 日本諸地域の実践を通じて」, 『美術フォーラム21』, vol.32, 2015.12, pp.77-82.

天内大樹「モノに触れつつ考えること(新刊紹介 ジョルダン・サンド著, 天内大樹訳

『帝国日本の生活空間』)」, 表象文化論学会 ニューズレター 『REPRE』, vol.26, <http://repre.org/repre/vol26/books/03/01.php>, 2016.1.

天内大樹「GK & RIA, 1952」, 『Voice of Design』, vol.22-1, 2016.5, pp.4-6, 14-24.

天内大樹「日常を彩る背景 いや、たいてい無彩色だけど。(新刊紹介 エイドリアン・フォーティ著, 天内大樹ほか共訳 『メディアとしてのコンクリート』)」, 表象文化論学会ニューズレター 『REPRE』, vol.28, <http://repre.org/repre/vol28/books/03/01.php>, 2016.10.

天内大樹「テラコッタと「帝冠式」」, 『華宵会』会報『大正ロマン』, 高島華宵大正ロマン館, No.38, 2016.10, pp.24-25.

Daiki AMANAI, The Possibilities of A Monument in 21st century Tokyo: Towers and the City, *Shizuoka University of Art and Culture bulletin*, vol.17, pp.117-122, [https://suac.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_uri&item\\_id=1377&file\\_id=18&file\\_no=1](https://suac.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=1377&file_id=18&file_no=1), 2017.3.

〔学会発表〕(計5件)

天内大樹「震災後の日常 集住と展示」, 芸術学関連学会連合第9回公開シンポジウム「藝術の腐葉土としてのダークサイド」, 東京国立近代美術館講堂, 2014.06.07.

AMANAI, Daiki. The Possibilities of A Monument in 21st century Tokyo: Towers and the City, 2nd International Conference of The International Society for the Philosophy of Architecture, Delft University of Technology, Delft, The Netherlands, 2014.07.11.

天内大樹「21世紀の東京における記念建造物の可能性 塔と都市」, 露光研究発表会 2014, 沖縄県立芸術大学, 那覇, 2014.09.06.

天内大樹「GK と RIA」, 日本デザイン機構フォーラム「栄久庵憲司で切る! ソーシャルデザインの未来を拓く」, 日仏会館, 恵比寿, 東京, 2015.06.19.

AMANAI, Daiki. A Position of the Concept of Architecture: Exhibitions in Interwar Japan, 20th International Congress of Aesthetics, Room #8-605, Seoul National University, Seoul, South Korea, 2016.7.28.

〔図書〕(計1件)

天内大樹「建築と都市文化」『博覧会と建築』, 高橋千晶/前川志織編『博覧会絵はがきとその時代』青弓社 2016(共著), pp.116-129, 135-137.

〔産業財産権〕

該当なし

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.ne.jp/asahi/d/ama/>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

天内大樹 (AMANA I, Daiki)

静岡文化芸術大学デザイン学部講師

研究者番号 : 40615035

以下該当なし